

## 「メアム・ロエズ」研究序説 ― 書名考

辻 圭秋

同志社大学大学院神学研究科博士後期課程

### 要旨

1730年からイスタンブルで出版され始めた「メアム・ロエズ」という一連の作品は、疑い無くユダヤ・スペイン語文学史上最も重要で、成功した作品である。それにも拘らず、この作品(群)は今まで十分に研究されてきたとは言い難く、そのことに関しては日本国内のみならず、ユダヤ人研究者の間でも同様である。本論文では、「序説」と題し、「メアム・ロエズ」に関する基本的な事柄について記述した後、従来の研究において十分に扱われてこなかった「書名」の問題を扱う。

「メアム・ロエズ」という句は詩篇 114 篇 1 節から採用されているが、『メアム・ロエズ 創世記』に附された序文等から書名の由来を、①ヘブライ語以外の「異国の言葉」で書かれたこと、②出版助成の篤志家に対する賛美、③「ヤコブの家」＝「ヘブライ語を解さない集団」に向けて書かれたこと、④同じ 114 篇に著者の名前を暗示する節があること、の 4 つに分けて考察、さらにもう 1 つを今後の研究課題として指摘する。

### キーワード

メアム・ロエズ、ユダヤ・スペイン語文学、セファラディーム、聖書註解、アンソロジー

### 1. はじめに

テルアビブ大学構内に位置するディアスポラ博物館に、「Jewish Languages」というコーナーがある。ディアスポラの地で発展したユダヤ諸語を紹介したものだが、「Ladino」のセクションでは三冊の書物が紹介されている<sup>1</sup>。一冊目は『レジミエント・デ・ラ・ヴィダ<sup>2</sup>』、二冊目は『メアム・ロエズ<sup>3</sup> 創世記<sup>4</sup>』、三冊目は『ラ・イストリア・ジュディーア・ユニヴェルサル<sup>5</sup>』で、各々の表紙のコピー

が陳列されている。学芸員がどのような意図でこの三冊を選んだのかは詳らかにしないが、ユダヤ・スペイン語<sup>6</sup>で書かれた作品の中で最大の文学的成功を収め、最も普及したのが本論文で扱うこの「メアム・ロエズ」であることは疑いない。

本論文ではセファラディーム<sup>7</sup>によって作られたユダヤ・スペイン語文学史上、金字塔として聳える「メアム・ロエズ」の研究「序説」として、本邦では全く知られていない作品のため、はじめに基本的な事実について記述する。その後、これまで研究史の中であまり注意が払われてこなかった書名の問題を4点に分けて考察し、さらにこれからの研究課題を提示する。

## 2. 「メアム・ロエズ」とは何か

### 2-1. 作品について

まず初めに、詩篇 114 篇 1 節のヘブライ語原文から採用された「メアム・ロエズ」(新共同訳聖書の「イスラエルはエジプトを ヤコブの家は異なる言葉の民のもとを去り」の「異なる言葉の民(から)」にあたる)と総称される作品(群)は一人の作者によって書かれたものではない。後に詳説するように、本作はフリーーという一人のラビによって始められたものであるが、彼自身は『メアム・ロエズ 創世記』を 1730 年にイスタンブルで出版した後、出エジプト記 9 章まで完成させ、その直後に若くして死去する。そのフリーーの遺志<sup>8</sup>を継ぎ、彼の著作方針とスタイルを維持しながら、19 世紀末から 20 世紀初頭まで、聖書各書に対する「メアム・ロエズ」が他のラビたちによって作られていくのである。

それでは「メアム・ロエズ」とはどのような作品か。ハラハー、アガダーを豊富に含み、各種ミドラシュや神秘主義の作品からの引用に満ち、民話も数多く採録している本書をユダヤ教文学史上どのように位置づけるかは、それ自体別稿で論じるべき主題であるが、とりあえずは「大多数のセファラディームの母語であり、容易に理解できるユダヤ・スペイン語で書かれ、週毎の聖書朗読箇所(パラシャー)に従って構成されたユダヤ教教説集成」、あるいは「一般民衆に向けて書かれたユダヤ教の手引き」と呼ぶことができるであろう。

### 2-2. 「メアム・ロエズ」後世の翻訳について

オリジナルの「メアム・ロエズ」、即ち 1730 年から約 170 年に亘ってユダヤ・スペイン語で書かれ続けた作品は、後に全てヘブライ語・英語に翻訳されることになる<sup>9</sup>。現代のユダヤ教徒はむしろこのヘブライ語・英語版の「メアム・ロエズ」を直接に知っていることが多いが、この「メアム・ロエズ」の翻訳は翻訳以上のものであることに留意する必要がある。実のところユダヤ・スペイン語の「メ

アム・ロエズ」は聖書の全ての書について書かれたものではない<sup>10</sup>。そこで「メアム・ロエズ」をヘブライ語に翻訳したイェルシャルミー<sup>11</sup>はユダヤ・スペイン語の「メアム・ロエズ」に不足している聖書各書について、自らの手で「メアム・ロエズ」を書き上げ、ヘブライ語の『ヤルクート・メアム・ロエズ』として完成させたのである。イェルシャルミーのヘブライ語訳は偉業であるが、『メアム・ロエズ 創世記』がユダヤ・スペイン語で書かれた1730年当時の科学的知識に基づく「誤った」記述等、イェルシャルミー自身が不必要と感じた部分を削除した他、翻訳自体もヘブライ語としての読みやすさを重視したために必ずしも正確ではないといった問題がある。これはまた別の主題とすべきなので、必要でない限り本論文ではユダヤ・スペイン語版の原典のみを問題とする。

### 2-3. 『メアム・ロエズ 創世記』作者の呼び名について

今まで『メアム・ロエズ 創世記』の著者の名を日本語で記す時は特に説明なく「フーリー」としてきたが、実はこの人物の名は多くの場合、あたかも第一音節の子音が無声軟口蓋破裂音/k/、即ち「クーリー(Rabbi Jacob Culi)」であるように表記されることが多い。カプランの英訳<sup>12</sup>にしても、『エンサイクロペディア・ジュダイカ』の見出し<sup>13</sup>にしてもそうである。実際彼の名はカフ(ハフ)、ヴァヴ、ラメッド、ユッド(しかしダゲシュとニクードはつけられていないので)と綴るので、一見それが正しいように思える。しかしこの名前は後述するように、正しくは(便宜的に『岩波イスラーム辞典』の転写方式に従ってアラビア語風に転写すると)「フーリー(Khuli)」(最終音節にアクセント)であり、語頭の子音は無声軟口蓋摩擦音/x/、ドイツ語の「Bach」の「ch」で発音する。私見ではこのような誤解が生じるようになったのは、ユダヤ・スペイン語の方言学上の理由と、ヘブライ語表記及びニクード規則に原因があるように思う。アラブ地域のユダヤ・スペイン語では通常、アラビア語において区別しているように無声軟口蓋摩擦音/x/と無声咽頭摩擦音/h/を独立した音素として区別し、通常アラビア語と対応させて前者をハフ、後者をヘットで綴る。そのような言語的背景からなされた表記法ではあるが、後世、セファラディームと直接の交渉のなかった者が、ヘブライ語のニクードの規則に従い語頭のハフにダゲシュ(カル)をつけ、「クーリー」と解釈し、無声軟口蓋破裂音/k/として発音・表記し始めたものと筆者には思われる。この点についてアメリカの有名なセファラディーのラビであるバロカス(David N. Barocas)はカプランに対して書簡を送り、以下のように証言している<sup>14</sup>。

1977年1月22日 フーリーの表記について、*Jewish Encyclopedia*、*Encyclopedia Judaica*の双方でどのように綴られているかを知りました。

二冊とも私の蔵書にあります。私は、セファラディーでない者が、彼らの文化ではないものを勝手に変えることを当然だと思うことに我慢がなりません。スペイン語を知っているものであれば、この[クーリーという]発音が嫌悪感をもよおす<sup>15</sup>ものであることが分かるはずです。

1977年6月10日 私は誰がフーリーという名前をクーリー(Culi)に変えたのか知りません。彼の名を「クーリー(Culi)」と呼んでいるのを聞いた覚えがありません。[引用者注：証拠として]Palestine Kosher Oriental Knishesの[同じフーリー姓の]「Albert Houli」氏の名刺を添付します。

以上のことを鑑みて、本論文では『メアム・ロエズ 創世記』の作者を「フーリー」と表記する。

#### 2-4. フーリーの家系と生涯について

『メアム・ロエズ 創世記』は前述の通りラビ・ヤアコヴ・ベン・メイル・フーリー(Rabbi Meir Khuli, or Rabbi Jacob Culi, 1689-1732<sup>16</sup>)によって書き始められた。ここではカプランの英語訳の序<sup>17</sup>に従って彼の家系と生涯を簡単にまとめる。ヤアコヴ・フーリーは父であるラビ・メイル・フーリー(Rabbi Meir Khuli, or Culi, 1638-1727)と、ラビ・モシェ・イブン・ハヴィヴ(Rabbi Moshe ibn Haviv, 1654-1696)の娘(不詳)との間におそらくエルサレムで生まれた。父のメイル・フーリーは50歳の時にクレタからエルサレムへと移住し、そこでモシェ・イブン・ハヴィヴと出会い、彼の娘と結婚することになった。イブン・ハヴィヴ家は数代前までサロニカの有力一族だったが、モシェ・イブン・ハヴィヴは1669年にエルサレムに上ることになった。

フーリーは祖父モシェ・イブン・ハヴィヴと祖母の死の後、ツファットやヘブロンに滞在した後、整理していた祖父の遺稿を印刷するため、1714年に印刷機のあるイスタンブルへと旅立つ。そこで当地のユダヤ教コミュニティのリーダーであったロゼネス(Rabbi Yehuda Rozenes, -1727)に見出され、ベート・ディーンのメンバーに選ばれる。祖父の遺稿を印刷し終えた後、ロゼネスの死後は彼の遺稿も整理し、1731年『ミシュネー・ラメレフ(Mishne la-Melekh)<sup>18</sup>』として出版する。『メアム・ロエズ 創世記』が出版されるのはその前年、1730年のことであった。没年月日は1732年アヴ月19日(8月9日)である。

#### 2-5. 『メアム・ロエズ 創世記』諸版及び校訂版について

『メアム・ロエズ 創世記』は上記のようにフーリーによって1730年に完成

し、イスタンブルにて初版が出版されたが、その後も版を重ね、1897年までに8刷を数えた。そのうち文献学的に重要なのは1730年の初版、1822年のリヴォルノ版、1864年のイズミル版<sup>19</sup>である。1822年のリヴォルノ版は西方のジブラルタルのユダヤ人コミュニティ(ユダヤ・スペイン語話者)のために出版されたものであり、1864年のイズミル版は130年を経て変化した当時のユダヤ・スペイン語に合わせ、ベンヤミン(Benyamin Roditi)とポントレモリ(Rabbi Raphael Hiyah Pontremoli)<sup>20</sup>によって改訂されたものである。

現代の研究者にとって最大の問題であるのは、ローディティ<sup>21</sup>が正しく指摘する通り、「メアム・ロエズ」という作品がユダヤ・スペイン語文学史上に聳える代表作品でありながら、学問的批判に耐えうる本文校訂版が極端に不足していることにある。確かに1964年から75年にかけてダビッド・ゴンサロ・マエソ(David Gonzalo Maeso)とパスクアル・レク(Pascual Recu)によって『メアム・ロエズ 創世記』及び『メアム・ロエズ エステル記』の校訂版が出版されたが<sup>22</sup>、残念ながら多くの研究者にとって学術的に耐え得る出来ではなかった。

その中で重要なのが、ロメウが発表した索引集<sup>23</sup>、及びペレッツが編集した『メアム・ロエズ 創世記』の選集<sup>24</sup>である。「メアム・ロエズ」という作品は、序文を除けば通常、「本文」と「索引<sup>25</sup>」から構成されるが、前者はトーラー(モーセ五書)についての各々の「メアム・ロエズ」の索引の校訂版であり、各版の全ての該当項を挙げ、さらに附録としてキーワードから索引にアクセスできるという優れた作品である。後者は文字通り『メアム・ロエズ 創世記』の学術的校訂版であり、「聖書註解」や「ハラハーに対する註解」「民話」等の主題に基づいた選集である。

しかしながら、依然として『メアム・ロエズ 創世記』の完全な(学術的使用に耐え得る)校訂版は未だ存在しておらず、このことが研究の進展を遅らせている直接的な原因と言える。

### 3. 「メアム・ロエズ」という書名について

ようやく本題に入るが、そもそも何故フリーは自らの作品を作るにあたってあえて「メアム・ロエズ」という書名にしたのだろうか。不思議なことにこの問題は今まで研究者の間でほとんど議論されてこなかった<sup>26</sup>。本章ではこの点について、四点に分けて考察し、五点目を今後の研究課題として指摘する。

#### 3-1.

まず、「メアム・ロエズ」という語句は詩篇114篇1節「イスラエルはエジプトを ヤコブの家は異なる言葉の民のもとを去り<sup>27</sup>」から採用されているのは明

らかである。この二語はヘブライ語序文(『メアム・ロエズ 創世記』にはフリーーの手によるヘブライ語序文とユダヤ・スペイン語序文の二つが本編に先立って附されている)の中に二箇所登場し、一つ目は本書の執筆目的である、ヘブライ語を解さない一般民衆のために彼の母語で分かりやすくトーラーを語るることについて、彼自身が自問自答する箇所<sup>28</sup>である<sup>29</sup>。

私は心の中で呟いた。「もしも私がこの24の書物[聖書]を、シュルハン・アルーフ<sup>30</sup>のように主のトーラーが彼らの口から滑らかに[語られる]ために、異なる言葉の民[の中]から明瞭に<sup>31</sup>説明するのであれば、[主よ、]あなたのトーラーはイスラエルのものとなるでしょう。」

この箇所を見るとこの「メアム・ロエズ」という書名は異国の言葉の民、つまりヘブライ語を解さなくなり、当地の支配的言語のみしか理解できなくなったユダヤ教徒に対して、あるいはそのような一般大衆の側からトーラーを彼らの母語で平易に語る、という本作品のコンセプトにぴったりと一致する。

### 3-2.

ヘブライ語序文に出てくる二つ目の箇所はもう少し複雑で、詩篇114篇1節後半とその直後の2節前半を組み合わせたものである。ヘブライ語序文の「喜捨について」と名付けられた章で、以下のように書かれている。

主の言葉を聞け。「ヤコブの家は異なる言葉の民より、ユダは[その中の]聖なるもの」、イスラエルの聖なるもの。<sup>32</sup>

本来詩篇114篇の1節と2節は対句法になっており、1節の後半及び2節の前半だけ抜き出すと意味が大きく変わるのであるが、フリーーはここであえて対句法を崩し、聖句はそのままにシンタックスが大幅に変わるような見事な引用をしている。

この箇所は実は『メアム・ロエズ 創世記』を出版するために、経済的に多大な尽力を尽くしたユダ・ミズラヒー(Yehudah Mizrahi)に関連するものである(彼はユダヤ・スペイン語版の序文でも二度に亘って言及され、慈善家として讃えられている<sup>33</sup>)。上のヘブライ語序文からの引用箇所の一つ前の章は実に「ユダについて」という表題がついており、上記引用箇所でもこの詩篇114篇2節の「ユダ」は彼、ユダ・ミズラヒーであると解するべきであろう。そうすると、まず本来出エジプトに関連する詩篇のこの節が、ユダ族ではなくユダ・ミズラヒー個人

を指すと解釈できる。その上でフリーは聖句の「ユダは神の聖なるもの イスラエルは神が治められるものとなった」の「聖なるもの」のヘブライ語原典に含まれる属格接尾辞三人称男性単数を意図的に操作して、「神の」「聖なるもの」という聖句本来の意味を変更している。聖句に含まれない「イスラエル」という句を文の最後に配置<sup>34</sup>することによって、「神の(聖なるもの)」ではなく、「イスラエルの(聖なるもの)」と読ませることにより、ユダ・ミズラヒーがユダヤ人コミュニティ全体の中で聖なる者である(本書出版に際し多大な経済的貢献をしてくれたから)、という意味にしているのである。

### 3-3.

以上二点は、身も蓋もない言い方をすれば「読めば分かる」類のものであるが、以下三点は上記二点とは少し趣を異にする。三点目は、上記3-1と3-2に関係することだが、詩篇114篇1節「メアム・ロエズ」という語句の前の、「ベート・ヤアコヴ」という語についてである。この語は、ユダヤ教聖書解釈の伝統においては、出エジプト記19章3節のラシの註解に見られるように、ユダヤ人の「女性」の集団を意味する、という解釈がなされることが多い。「女性」の集団を「学問語であるヘブライ語を解さない集団」と解釈すれば(フリーの時代は女性に留まらなかったが)、この「ベート・ヤアコヴ」の含意も「メアム・ロエズ」という作品の趣意に合致することになり、平仄が合うのである。

### 3-4.

「メアム・ロエズ」という語句が詩篇114篇1節に由来することは上に述べたが、実は書名を考える上で重要な節が同篇7節にも存在する。即ち「地よ、身もだえせよ、主なる方の御前に ヤコブの神の御前に」という箇所である。この聖句には『メアム・ロエズ 創世記』著者のヤアコヴ・フリーの名「ヤコブ」だけでなく、姓「フリー」(新共同訳では「身もだえせよ」の箇所)に似た語も含まれているのである。しかし詩篇のこの箇所の「フリー」はヘットであって、フリー自身が自分の名を記す時に使ったハフ(カフのダゲシュなし)ではない(ハフの「フリー」という語は聖書には存在しない)。だが無声咽頭摩擦音と軟口蓋摩擦音を区別しないユダヤ・スペイン語話者(やイディッシュ語話者)の間ではこの「フリー」と「メアム・ロエズ」いう語は容易に連想され、結びつくであろう。

### 3-5.

これは今後の研究課題であるが、実は2-4で述べた通り、フリーの母方の家

系は「イブン・ハヴィヴ」姓である。言うまでもなくイブン・ハヴィヴ家は(フリー家とともに)に高名な学者の家系で、ことに『メアム・ロエズ 創世記』著者のヤアコヴ・フリーと同じ名を持つヤアコヴ・イブン・ハヴィヴ(1450-1516)が最重要である<sup>35</sup>。フリーの母方の家系がかの有名なイブン・ハヴィヴ家である、というのはメアム・ロエズ研究においてよく指摘されることなのであるが、ではその影響や評価如何、となると実はほとんど研究がされていない<sup>36</sup>。

ヤアコヴ・イブン・ハヴィヴの代表作はアガダー選集である『エーン・ヤアコヴ(en yaakov)』である。また、ヤアコヴ・イブン・ハヴィヴ自身は『エーン・ヤアコヴ』を完成させることなく逝去してしまうが、息子レヴィ・イブン・ハヴィヴ(1480-1545)が父の遺志を継ぎ完成させる。その書名が「エーン・ヤアコヴ」と区別して「ベート・ヤアコヴ」と名付けられているのである。ヤアコヴ・フリー自身が彼のイブン・ハヴィヴ姓出自であることをどれだけ意識していたのか<sup>37</sup>、エーン・ヤアコヴ、ヤアコヴ・イブン・ハヴィヴに対する評価は如何様なものなのか<sup>38</sup>、ハラハー、アガダー、倫理の関係をどのように捉えているのか、これは全て筆者の今後の研究課題であり、現時点では可能性の指摘のみに留める。

#### 4. おわりに

以上、「メアム・ロエズ研究序説」と称し、基礎的な事実の記述、及び書名の考察を行った。「メアム・ロエズ」という書名については、

- ①「異なる言語」=ヘブライ語以外の言語で著作されたため、
- ②「メアム・ロエズ」という聖句の次に続く「ユダ」を、出版に経済的尽力をしてくれたユダ・ミズラヒーに結びつけることが出来たため、
- ③「メアム・ロエズ」の前の聖句、「ベート・ヤアコヴ」が「ユダヤ人女性」=ヘブライ語を解さない集団、を表象し得るため、
- ④当該聖句の詩篇中に、作者の姓「フリー」を連想させる一語があり、かつその節中に作者の名「ヤアコヴ」も含んでいるため、

の四点を提示し、五点目として⑤母方の先祖であるヤアコヴ・イブン・ハヴィヴ、及びその代表作『エーン・ヤアコヴ』との関係を指摘した。

「序説」と銘打って序説の体をなしていないという向きもあろうが、本邦において十分な研究蓄積がないのであれば、拙速を慎み、一步一步着実に、それぞれ「書名」というレベルから研究を始めるべきだと筆者は考え、このような方針を採った次第である。

## 註

- <sup>1</sup> 2012年8月8日確認。
- <sup>2</sup> “Rejimiento de la vida.” 「生活の紀律」の意。アルモンシーノ (Moshe ben Barukh Almonsino, 1515頃-1580頃) 著、1564年サロニキ(テッサロニキ)刊。以後、註における出版地は出来るだけ原本の表記に則る。また、ユダヤ・スペイン語の正書法は今のところ存在しないが、本論文におけるユダヤ・スペイン語の転写は Avner Perez, *Dikcionario Amplio Djudeo-espanyol — Ebreo* (Israel: La Autoridad Nacionala del Ladino I su Kultura/ Sefarad-El Instituto Maale-Adumim, 2007) に従う。
- <sup>3</sup> 本書の正式名称は、「セフェル・メアム・ロエズ」であるが、実際には後述するヘブライ語訳のタイトルに合わせて「ヤルクート・メアム・ロエズ」と呼ぶ方が、現代のユダヤ教徒、特にアシュケナズイーにとっては通りがいい。また「メアム・ロエズ」の前置詞「メ」を省略して「アム・ロエズ」と呼び習わす場合も多い。本書では「セフェル」を省略し「メアム・ロエズ」と表記する。
- <sup>4</sup> 陳列されているコピーは1748年クシュタンディナ(コンスタンティノーブル=イスタンブル)刊の2版。
- <sup>5</sup> “La historia djudia universal.” 「ユダヤ世界史」の意。シャキー (Rabbi Haim Yitzhak Shaki, 1852-1940) 著、1898年イスタンブル刊。なお、シャキーは1899年に『メアム・ロエズ 雅歌』を出版している。
- <sup>6</sup> 彼らの言語名に関しては現在でも呼び名が一定しておらず、「ラディーノ」「ユダヤ・スペイン語」「ジュデズモ(D)judezmo」「(エ)スパニョール(e)spanyol」「(エ)シュパニョリート(e)shpanyolit」「セファルディー語 la lengua sephardi」等が散見される。現在この原語の母語話者が最も多いとされるイスラエル国内において、最も通用度が高いのは「ラディーノ」及び「ユダヤ・スペイン語」である。しかし研究者の間では「ラディーノ」は、聖書本文をスペイン語に翻訳する際にヘブライ語の統語を崩さず、なおかつ文法性等形態面においてもヘブライ語に一致させる逐語訳から生まれた人工言語、として区別することが多い。本論文では、この言語を転写する際に底本として用いる辞書が「ユダヤ・スペイン語」と名乗っていることから「ユダヤ・スペイン語」を採用する。
- <sup>7</sup> 「セファラディーム(欧語系表記・発音)」「スファラディーム(現代ヘブライ語発音)」等表記に揺れが見られるが、本論文では彼ら自身のヘブライ語伝統に従い、「セファラディー(ム)」と表記する。本論ではこの語を、1492年を頂点としてイベリア半島から追放されたユダヤ・スペイン語を母語とするユダヤ人の子孫、及びそのコミュニティに同化したユダヤ人についてのみ用い、その他のコミュニティ、特にユダヤ・スペイン語を母語としないユダヤ人に関しては用いない。なお、歴史的にこの語が、現在「セファラディー」とされる全てのコミュニティで自称として使用されたわけではない。他の自称の例として、「(e)spanyol(スペイン人の意)」や「(i)stambolis(イスタンブル人の意)」等、各都市を基盤としたものが挙げられる。
- <sup>8</sup> ユダヤ・スペイン語の序文においてフーリーは「この作品[メアム・ロエズ]は将来的に7分冊として完成される。1. 創世記 2. 出エジプト記・レビ記 3. 民数記・申命記 4. 前預言書[ヨシュア記、士師記、サムエル記、列王記] 5. 後預言書[イザヤ書、エレミヤ

- 書、エゼキエル書] 6. 12 預言書及び5つの巻物[エステル記、哀歌、ルツ記、コヘレト書、雅歌] 7. 残り全て](Yaakov Khuli, *Sefer Me'am Lo'ez Bereshit* (Kushtandina, 1730), vi-a. 以下「ML」と略記。初版の項付けは本文から始まり、序文にはつけられていないので便宜上ローマ数字で示す。)と記している。しかしながらフリーの死後の作品は、ヨシユア記以降必ずしもこの順番に出版されたわけではなく、分量も膨大なため上記のような合本としては完成しなかった。なお、[]内は筆者訳注(以下同)。
- <sup>9</sup> 英語・ヘブライ語の他にも19世紀末に創世記と出エジプト記の一部がユダヤ・アラビア語に翻訳されアルジェとジェルバ島(チュニジア)で出版されたが、本論文では存在の指摘に留める。また、フランス語やスペイン語にも一部翻訳があるが、些末になるので列挙するのは控える。
- <sup>10</sup> 『メアム・ロエズ』と題名に謳ってはいないがメアム・ロエズのスタイル・方針に則って書かれた作品をどのように解釈するかという問題はあるが、たとえどれだけ「メアム・ロエズ」の範囲を広くとったとしても聖書全てを網羅することはできない。
- <sup>11</sup> Shmuel Yerushalmi はペンネーム(のうちの一つ)。本名 Shmuel Kroyzer(1921-1997)。
- <sup>12</sup> Jacob Culi, *The Torah Anthology MeAm Lo'ez Genesis 1*, trans. Aryeh Kaplan(New York, Jerusalem: Moznaim Publishing Corporation, 1988)。
- <sup>13</sup> Anon., 'Culi, Jacob,' in *Encyclopedia Judaica 2<sup>nd</sup> ed. (vol. 5)* (New York: Thomson Gale, 2007), pp. 328-329.
- <sup>14</sup> 以下の引用はともに Aryeh Kaplan, "Mr. Barocas and the Me'am Lo'ez" in David Barocas, and Marc D. Angel, eds., *Studies in Sephardic Culture: The David N. Barocas Memorial Volume* (New York: Sepher Harmon Press, 1980), p. 17.
- <sup>15</sup> おそらく「culo(英: arse, ass)」というスペイン語のことを言っているのだと推測される。ヘブライ大学人文学部ヘブライ語・ユダヤ諸語学科教授ブニス氏(David M. Bunis)にご教示頂いた。謹んで感謝申し上げます。
- <sup>16</sup> 生年についてはカプランの説に従う。フリーの生年は1674, 1685, 1689, 1690年等意見が割れているが、カプランの説は以下のとおりである。フリーが『メアム・ロエズ 創世記』のヘブライ語序文で、彼の父は50歳エルサレムに到着し、そこで40年生き1727年に死んだ、とある(ML, iii-a)。そこからの逆算によればフリーの父がエルサレムに到着したのは1687年、そこでモシェ・イブン・ハヴィヴの娘と結婚したため、子であるフリーが生まれたのは1687年以前にはあり得ない。Jacob Culi [1988], *op. cit.*, p. 469.
- <sup>17</sup> *Ibid.*, pp. xv-xxix.
- <sup>18</sup> マイモニデス(Rabbi Moshe ben Maimon, 1135-1204)の『ミシュネー・トーラー』に対する註解。本書は『ミシュネー・トーラー』とともに印刷されることが多い。その知名度から、上述したヘブライ語への翻訳者であるイェルシャルミーは出エジプト記(創世記より先に出版された)に附した序文に、フリーのことを「ミシュネー・ラメレフの校訂者」とも紹介している。Yaakov Khuli, *Yalkut Me'am Lo'ez Sefer Shemot (vol.1, in Hebrew)*, trans. Shmuel Yerushalmi (Israel: Wagschal, 1967), p. 5.
- <sup>19</sup> Hebrewbooks.org のサイトで入手・閲覧できるのはこのイズミル版(2012年9月9日取得)
- <sup>20</sup> なおポントレモリは1864年イズミルにて『メアム・ロエズ エステル記』を出版している。

- 
- <sup>21</sup> Eduard Roditi, “The Me’am Lo’ez and its Various Editions,” *European Judaism* 26-1 (1993), pp. 17-23 を参照。なお、本節で述べた 1864 年イズミル版『メアム・ロエズ 創世記』の改訂に携わったベンヤミン・ローディティ (Benyamin Roditi) の傍系の子孫がこのエドゥアルド・ローディティ。
- <sup>22</sup> 序文は David Gonzalo Maeso, and Pascual Recu, eds., *Me’am lo’ez: el gran comentario bíblico sefardí: prolegómenos* (Madrid: Publicaciones del Instituto Ibn Tibbon, 1964)。創世記本文は 1969 年と 1970 年、エステル記は 1974 年に同じ出版社から出版。
- <sup>23</sup> Pilar Romeu, *Las Llaves del Meam Loez* (Barcelona: Tirocinio, 2000)。なお本書は多くの学術機関で書誌情報(書名)が「Las Haves...」の様に間違っって登録されている場合が多いので注意。
- <sup>24</sup> Avner Perez, ed., *Meam Loez Bereshit Selektion de Tekstos: Kon Introduksiones, glosario I indises*, (Israel: Instituto Maale Adumim, 2006)。
- <sup>25</sup> 本文の後に付された、「肯定命令」「否定命令」のようにテーマ毎に分け、本文の内容を簡潔にまとめ、本文での該当箇所を記したもの。しかしながらこの索引には問題もあり、無批判に信用するのは問題がある。Pilar Romeu, “The Me’am Lo’ez on the Torah and its Various Editions (in Hebrew)” in Avner Perez ed., *ibid.*, pp. xxi-xxiii. 参照。
- <sup>26</sup> たとえばこの分野の研究の金字塔である Louis Landau, “Content and Form in the Me’am Lo’ez of Rabbi Jacob Culi (in Hebrew),” PhD thesis (Israel: the Hebrew University in Jerusalem, 1980)。でもこのことについては十分に論じられていない。
- <sup>27</sup> 新共同訳。「異なる言葉の民のもとを」が原文「メアム・ロエズ」に該当する。以下特に断りのない場合、聖書からの引用は全て新共同訳による。
- <sup>28</sup> この部分の「メアム・ロエズ」という語句は 1730 年初版のクシュタンディナ刊や 1822 年のリヴォルノ版では大文字で印刷されて強調されているが、刊によっては例えば 1864 年のイズミル版のように特に強調されていない版もある。
- <sup>29</sup> *ML*, ii-a. なお、『メアム・ロエズ 創世記』の引用は全て 1730 年初版によるが、適宜諸版を確認している。『メアム・ロエズ 創世記』諸版の閲覧については、エルサレムのベン・ツヴィ研究所研究員コーヘン氏 (Dov ha-Kohen) 及びマアレーアドミーム研究所所長ペレツ氏 (Avner Peretz) 氏が快諾して下さったため叶うこととなった。この場を借りて謹んで感謝申し上げる。
- <sup>30</sup> 『シュルハン・アルーフ (Shulhan Arukh)』はヨセフ・カロ (Yosef ben Ephraim Caro, 1488-1575) のハラハー集成。1565 年ヴェニスで初版が出版される。
- <sup>31</sup> 「明瞭に」は申命記 27 章 8 節「あなたは石の上にこの律法の言葉をすべてはっきりと書き記しなさい」の「はっきりと」と同じ表現。
- <sup>32</sup> 新共同訳に従うと意味をなさなくなるため私訳。実際には括弧等は記されていない。便宜上、詩篇からの引用を括弧でくぎった。原文は以下の通り。*ML*, ii-b.  
שמעו דבר ה' בית יעקב מעם לעז היתה יהודה קדשו קדש ישראל
- <sup>33</sup> *ML*, vii-b, and ix-b.
- <sup>34</sup> そもそも『メアム・ロエズ 創世記』ヘブライ語序文は全文末「イスラエル」という単語で終わるように書かれている。
- <sup>35</sup> ヤアコヴ・イブン・ハヴィヴ、及び『エーン・ヤアコヴ』に関して筆者が知っていること

---

は、全て飯郷友康氏(ヘブライ大学人文学部ヘブライ文学学科博士課程在籍)の温かいご教示によるものである。謹んで感謝申し上げます。勿論ここでの文章の責任は全て筆者が負う。

<sup>36</sup> 「フリーーは彼の祖先が当時偉大なタルムード学者の一人であり、大衆向けのエーン・ヤアコヴを著したという事実に感銘を受けた」 Jacob Culi [1988], *op. cit.*, p. xiv. と、英語への翻訳者カプランは序文に記すが、出典が明記されていない。また、エーン・ヤアコヴが「大衆向け」であったかどうかの判断を下す力は今の筆者にはない。

<sup>37</sup> 少なくとも、ヤアコヴ・フリーーの祖父、モシエ・イブン・ハヴィヴ(1654-1696)に関しては、彼から並々ならぬ影響があったことが各種一次史料から明らか。そもそも彼がイスタンプルに赴いたのはツファットで行っていた祖父の遺稿の整理を終え、出版するため(当時、ツファットにもエルサレムにも印刷所はまだなかった)であった。

<sup>38</sup> ヤアコヴ・イブン・ハヴィヴの名は少なくともヘブライ語及びユダヤ・スペイン語序文の中には見られない。『エーン・ヤアコヴ』自体はユダヤ・スペイン語序文の中に一度顔をのぞかせる。しかし筆者にはこれはフリーーのヤアコヴ・イブン・ハヴィヴに対する愛着というよりは、当時の「定番書」という一般的な文脈のように思われる。

「しかし彼[、フリーーの同時代の大多数である、ヘブライ語能力が十分でないユダヤ教徒]が仕事から帰ってきてても[ユダヤ教を]学習するための書籍は全く見つけられない。もし彼が[ヘブライ語で書かれた]ミドラシュ、エーン・ヤアコヴ、シュルハン・アルーフ、あるいは他の定評ある作品 — 例えそれがハラハーには関係ない[比較的容易な]本であったとしても — を手に取ったとしても、彼にとってはあまりにも難しすぎるのである。彼はそれを理解できないから、すぐにそれをほっぽり出すだろう。」 *ML*, v-a.

An examination of the title “Me’am Lo’ez”  
by Rabbi Yaakov Khuli (1689-1732)

Yoshiaki Tsuji  
Doctoral Student  
Graduate School of Theology, Doshisha University

**Abstract:**

Me’am Lo’ez, first published in Istanbul (Constantinople) in 1730, is undoubtedly the most important and successful literary work in the history of Judeo-Spanish literature. Nevertheless, this monumental masterpiece has been largely neglected, not only in Japan but also among Jewish scholars. In this article, I offer some basic facts on the work and examine the title of the book “Me’am Lo’ez,” which is taken from the verse Psalms 114: 1; “When Israel went out of Egypt, the house of Jacob from a people (Me’am) of strange language (Lo’ez).”

I identify four characteristics of the work that establish its status as a classic. The first characteristic is that it was written in colloquial Judeo-Spanish (Ladino), not Hebrew, the eternal sacred language for Jews. That’s why it suits for the verse “a people of strange language”.

The second characteristic relates to the philanthropist Yehuda (Judah) Mizrachi, who offered economic assistance for publishing the book “Me’am Lo’ez Bereshit.” Since the words “Me’am Lo’ez” follow the verse psalms 114: 2; “Judah was his sanctuary, and Israel his dominion,” the author quoted these two verses (Psalms 114: 1-2), turning its original meaning into the praise for Yehuda Mizrachi.

The third characteristic has to do with the words “Bet Yaakov,” which precede the words “Me’am Lo’ez” in the verse of the psalms 114: 1, and implies in Jewish tradition “Jewish women,” consequently “illiterates of Hebrew” in this context.

The fourth one is associated with the verse of psalms 114: 7; “Tremble (Huli), thou earth, at the presence of the Lord, at the presence of the God of Jacob.” The first word “Tremble (Huli)” has similar sound to the author’s family name Khuli.

Moreover, this article points out that there is yet another distinguishing characteristic of Me’am Lo’ez, which is the work’s relationship with Yaakov Khuli’s maternal lineage, the family of Ibn Haviv. Yaakov Ibn Haviv who wrote famous Aggadah anthology “En Yaakov” is of that lineage.

**Keywords:** Me’am Lo’ez, Judeo-Spanish Literature, Sephardim, Biblical Interpretation, Anthology